

Sun. Nov 8, 2020

D会場

スポンサードセッション|ライブ

スポンサードセッション3

座長:菊谷 武(日本歯科大学口腔リハビリテーション多摩クリニック)

12:00 PM - 12:40 PM D会場

[SL2] 老いても足で歩くまち、老いても口から食べるまち

○丸山 道生¹ (1. 医療財団法人緑秀会 田無病院 院長)

スポンサードセッション|ライブ

スポンサードセッション5

2:30 PM - 3:10 PM D会場

[SO7] 超高齢社会に向けた義歯のケアとホームメンテナンス

スはどのように考えるべきか?

○河相 安彦¹ (1. 日本大学松戸歯学部有床義歯補綴学講座)

スポンサードセッション|ライブ

スポンサードセッション6

座長:米山 武義(米山歯科クリニック)

3:50 PM - 4:30 PM D会場

[SL3] 医療現場におけるヒアリング IQの向上による過小評価

とコミュニケーションロスの抑制

○中石 真一路^{1,2} (1. ユニバーサル・サウンドデザイン株式会社、2. 聴脳科学総合研究所)

スポンサーセッション | ライブ

スポンサーセッション3

座長: 菊谷 武 (日本歯科大学口腔リハビリテーション多摩クリニック)

Sun. Nov 8, 2020 12:00 PM - 12:40 PM D会場

共催: イーエヌ大塚製薬株式会社

ライブ講演はこちら

[SL2] 老いても足で歩くまち、老いても口から食べるまち

○丸山 道生¹ (1. 医療財団法人緑秀会 田無病院 院長)

(Sun. Nov 8, 2020 12:00 PM - 12:40 PM D会場)

[SL2] 老いても足で歩くまち、老いても口から食べるまち

○丸山 道生¹ (1. 医療財団法人緑秀会 田無病院 院長)

【略歴】

1980年：

東京医科歯科大学医学部 卒業

1983年：

東京都立駒込病院 病理科・外科医員

1988年：

東京医科歯科大学 第一外科医員

1990年：

カリフォルニア大学サンディエゴ校メディカルセンター 外科

1992年：

東京医科歯科大学 第一外科助手

1993年：

東京都立大久保病院 外科医長

2004年：

東京都職員共済組合青山病院 外科部長

2005年：

東京都保健医療公社大久保病院 外科部長

2014年：

現職、田無病院 院長

地域包括ケアシステムの地域での構築

超高齢化社会において、高齢者が住み慣れたまちでいつまでも元気に暮らすためには、地域包括ケアシステムの構築が重要である。我々の活動拠点である西東京市は2011年にWHOの健康都市連合に加盟し、「健康応援都市」を目指している。そして地域包括ケア推進協議会が設立され、6部会が活発に活動をし、市をあげてのフレイル予防、食支援の取り組みも行ってきた。田無病院は西東京市の地域包括ケア推進の中心的役割を果たすとともに、独自のプログラムで地域包括ケアを推進している。そして「老いても足で歩くまち、老いても口から食べるまち、西東京」のスローガンを掲げている。

地域での「栄養」と「運動」の重要性と食支援活動

高齢者が地域で最期まで元気に暮らすためには、「栄養」と「運動」が最も重要といえる。まさに「老いても足で歩くまち、老いても口から食べるまち」を作っていくことが必要である。さらに「社会参加」を加えると、それはフレイル予防の3要素となる。地域で栄養を考えること、食や栄養を支えることは、地域包括ケアの推進のための大きなキーワードである。現在、栄養指導・栄養改善や食支援の地域での活動が、全国で芽吹いている。Tokyo EATや新宿食支援研究会、ごちそうさまの会など多くの団体が地域の食支援をテーマに活動し、東京の北多摩北部医療圏では栄養検討部会が、西東京市では食支援活動研究が行われ、官民挙げての地域での取り組みとなってきた。特記すべきは、このような食支援活動に地域の歯科医師が中心的役割を果たしていることである。

地域での高齢者栄養改善・維持の取り組み

講演では、我々の行っている取り組みを紹介する。1) 地域での嚥下調整食分類の周知；嚥下調整食のインフォーマティブ・ポスターの作成とその効果を検証している。2) 最期まで口から食べるプロジェクト；日本歯

科大学口腔リハビリテーションクリニックと共同で、入院から在宅までの嚥下機能の評価とリハビリを行っている。3) 地産地消の病院食；西東京市 JAの協力を得て、近隣の農家でとれた野菜を使った病院食を提供。4) 農業作業リハビリテーション；隣接する東京大学生態調和農学機構と共同研究で、各種の江戸野菜を育て収穫し食するというリハビリを行っている。その他、西東京市に協力し行っている「フレイル予防」や「食支援活動」も紹介する。

スポンサーセッション | ライブ

スポンサーセッション5

Sun. Nov 8, 2020 2:30 PM - 3:10 PM D会場

共催：グラクソ・スミスクライン・コンシューマー・ヘルスケア・ジャパン株式会社

ライブ講演はこちら

[SO7] 超高齢社会に向けた義歯のケアとホームメンテナンスはどのように考えるべきか？

○河相 安彦¹ (1. 日本大学松戸歯学部有床義歯補綴学講座)

(Sun. Nov 8, 2020 2:30 PM - 3:10 PM D会場)

[SO7] 超高齢社会に向けた義歯のケアとホームメンテナンスはどのように考えるべきか？

○河相 安彦¹ (1. 日本大学松戸歯学部有床義歯補綴学講座)

【略歴】

1984年：

日本大学松戸歯学部卒業

2005年：

The University of Newcastle, Faculty of Health 修士課程修了

2007年：

日本大学専任講師

2007年：

McGill university Adjunct Professor

2010年：

日本大学教授

2017年：

日本大学FD推進センター副センター長

2020年：

日本大学松戸歯学部附属病院病院長

(学会活動)

一般社団法人日本老年歯科医学会理事

公益社団法人日本補綴歯科学会理事

日本義歯ケア学会理事長

ご存知の通り、我が国の歯科疾患実態調査からも年を増すにつれ歯を失うことは明らかであり、それに伴う総義歯または部分床義歯の需要の増加も見込まれている。総義歯に焦点を絞ると、装着者の年齢構成は10年単位で高齢化率が高まっている。この結果は、義歯装着者の背景の多様性が想像される。ここでの多様性とは全身疾患や、精神疾患、社会的な制約などさまざまでありそれらが複合している。世界に目を転じると60歳以上人口は2050年までに20億人に達すると予想されている。これは、現在の2倍以上の数字である。

義歯のケアに関わらず、口腔のケアは本人が行うことが基本である。しかし、このような人口構成にシフトすると周囲の支援者も巻き込む必要があるのではないだろうか？では、日常的に我々が指導しているものの、「最適な義歯のケア」とは？という素朴な疑問が湧き上がる。

The Oral Health Foundation (以下 OHF) は、口腔領域の健康増進をグローバルに展開することを目的とし、健康増進の支援をする医師、歯科医師、支援を必要とする患者などへ、公平かつ独立した専門家の提言を提供している非営利慈善団体である。2018年 OHFが国際的なパネルメンバーを構成し、総義歯のケアとメンテナンスに関する科学的エビデンスの包括的なレビューを行なった。その結果、「最適な義歯のケア」を決定づける統一見解はなく、各学術団体や歯科医師団体および企業のガイドラインなどは非常に多様であり、また一貫性に乏しい実態が浮かび上がってきた。つまりエビデンスに基づく正しいケアは未だ明確でないことが明らかとなった。

しかしながら、現在のみならず、未来に向けて「最適な義歯のケア」に関する情報の必要性は増すばかりである。本セミナーは白書の概要を解説し、現状のエビデンスで考えられる最善のケアとは何か？について考察するとともに、今後ますます多様になる義歯装着者へのケアはどのように考え、何を行うべきかという課題にも触れさせていただきたい。

スポンサーセッション | ライブ

スポンサーセッション6

座長:米山 武義(米山歯科クリニック)

Sun. Nov 8, 2020 3:50 PM - 4:30 PM D会場

共催:ユニバーサル・サウンドデザイン株式会社

ライブ講演はこちら

終了後のアンケートにご協力ください。

アンケート: <https://forms.gle/unWHB5V2VovojkYe6>

【略歴】

昭和54年:

日本歯科大学歯学部卒業

昭和54年:

同大学助手(歯周病学教室)

昭和56~58年:

スウェーデン、イエテボリ大学歯学部留学

平成2年:

米山歯科クリニック開業

平成9年:

歯学博士

平成16年:

医学博士

平成23年:

日本歯科大学生命歯学部 臨床教授

平成24年:

日本老年歯科医学会 専門医

平成25年:

日本歯科大学新潟生命歯学部 客員教授

<平成27年:

静岡県在宅歯科医療推進室運営委員

平成31年:

昭和大学客員教授

[SL3] 医療現場におけるヒアリング IQの向上による過小評価とコミュニケーションロスの抑制

○中石 真一路^{1,2} (1.ユニバーサル・サウンドデザイン株式会社、2.聴脳科学総合研究所)

(Sun. Nov 8, 2020 3:50 PM - 4:30 PM D会場)

[SL3] 医療現場におけるヒアリング IQの向上による過小評価とコミュニケーションロスの抑制

○中石 真一路^{1,2} (1. ユニバーサル・サウンドデザイン株式会社、2. 聴脳科学総合研究所)

【略歴】

2009年：

NPO法人日本ユニバーサル・サウンドデザイン協会 会長

2012年：

ユニバーサル・サウンドデザイン株式会社 代表取締役

2016年：

広島大学 宇宙再生医療センター 研究員

2019年：

南カリフォルニア大学 ジェロントロジー学科 通信教育課程修了

2020年：

聴脳科学総合研究所 所長

日本の2017年度における高齢化率は27.7%と世界でもトップクラスであり2035年の高齢化率は33.4%と予測されており、3人に1人が65歳以上の高齢者となる社会が到来すると推計されており、65歳以上の高齢者における難聴人口は1500万人と推計されるものの日本における補聴器装用率は軽度・中等度難聴者で約7%程度に留まっている。

インフォームド・コンセントが主流となっている日本の医療現場では今まで以上に医療スタッフと患者が質の高いコミュニケーションをとりラポール形成することの重要性が高まっているが、未だ高齢者に対する医療体制は十分に整っているとは言えない。

その一例として、医療現場のスタッフが高齢患者の『聴こえの状態に対する十分な理解（ヒアリング IQ）』を持たずに検査、診断、説明、指導を実施し、その過程で過小評価およびコミュニケーションロスを招く事例が散見される。実際に当社で実施したアンケートでは、ほぼ全ての医療現場スタッフが高齢患者の聴覚機能低下により十分なコミュニケーションをとることが難しいと回答を得た。

老年歯科医学会においても「口腔機能低下症に関する基本的な考え方（H30.3）」が提唱され、その中で検査、診断、説明、同意、生活指導、栄養指導など、人と人によるコミュニケーションを必要とする項目が多くある。

当社では話者側からも対話を支援することが可能な「卓上型対話支援システム comuoon®」を開発し、すでに多くの医療機関で利用されており、検査指示、認知症検査、外来受付対応、入院時の説明、在宅医療などあらゆる医療現場における高齢患者とのコミュニケーションが必要なシーンでは必須のツールとなり医療従事者のヒアリング IQ向上に貢献している。

これは聴覚が低下した高齢患者と十分なコミュニケーションが取れなかった経験が、医療従事者のヒアリング IQを高めるきっかけとなり、より質の高い医療サービスを提供したいと考える医療機関が増加していることも裏付けていると考える。

以上のことから、ヒアリング IQを高め、聴覚機能が低下した高齢患者との対話を支援することが医療機関においてどれだけ重要であるか、実際の comuoon®導入事例や臨床評価を交え、脳科学的視点から研究成果についてご紹介する。